

## SFC 研究所プロジェクト補助 報告書

環境情報学部 中室牧子

### 「フィリピンスラム地域における先端的フィールド実験」

本研究では、2015 年度に実施したベースラインサーベイに基づき、本年 8-9 月に(1)保護者と(2)子どもそれぞれへの政策介入プログラムを実施した。(1)については保護者向けのワークショップを開催し、教育が子どもの認知および非認知能力を高めて、将来の高い所得や豊かな社会生活につながることを説明し（「教育のリターン」の周知）、また、ムダ使いをやめて貯金すれば大学進学のコストもまかなえることを説明したうえで貯金箱を配布し（貯蓄支援）、その後も定期的に教育と貯蓄の重要性について情報提供を行う（リマインダー）。一方、(2)については、子どもの学習意欲と基礎学力を上げるため、放課後に（専門家の指導・監修のもと）お絵かき（1-2 年生）、読み聞かせ（3-4 年生）、タブレット PC を用いた学習（5-6 年生）の各プログラムを実施した。

カシラハンの 2 つの公立小学校の幼稚園から小学校 6 年生までの生徒のうち、スターセクションと呼ばれる成績優秀者のクラスと、ヘテロセクションと呼ばれる普通クラスの生徒をランダムに 3 つのグループに分け、親子ともに介入を受ける（(1)+(2)）、子のみ介入を受ける（(2)のみ）、両方の介入を受けない（(1)も(2)もなし）とした。

8月13日、8月20日、27日、9月10日、17日、24日、25日の7日間で、9:00～15:00までの間、1時間おきに保護者向けのワークショップを実施し、そこでも保護者向けの（A4で1枚程度の）短いサーベイを実施し、現在の教育への関心や貯蓄額などを確認した。9月はこの7日間に、直接これなかった家庭を訪問し、ワークショップの説明とサーベイを実施。対象者としていた保護者約1,000人の92%からサーベイを回収することができた。その後、9月から2つの小学校の放課後に子ども向けの介入を実施した。フィリピンでは、4-5月が夏休みに該当するため、9月から約半年にわたって行われた介入の効果を明らかにするため、大規模なサーベイを実施した。

#### ① 親に対する情報提供のワークショップの実施（親向けの介入）

このワークショップは約1時間程度1回きりで行われたもので、あらかじめ子どもを經由して、保護者に対する招待状を発送しておき、休日である指定の日に学校へ来てワークショップを受けてくれるように依頼した。このエリアは貧困率が高く、多くの場合日雇い労働で生計を立てていることから、ワークショップに参加することの機会費用が高いことを鑑み、参加の見返りとして、3列目の左下の写真のようなグロッサリーバック（カシグラハンエリアの1日あたりの平均的な所得である350ペソ（=700円）相当の米や砂糖、コーヒーなど）を提供することとした。ほとんどが母親で、時々同居の祖父母などの姿も見られた。

小さな教室に 20 人前後ずつ振り分けられて、1 時間のワークショップでは教育が子どもの認知および非認知能力を高めて、将来の高い所得や豊かな社会生活につながることを説明し（「教育のリターン」の周知）、また、ムダ使いをやめて貯金すれば大学進学のコストもまかなえることを説明したうえで貯金箱を配布し（貯蓄支援）、その後も定期的に教育と貯蓄の重要性を強調した。

具体的には、12 歳までに教育投資を行うことのリターンが高いこと、そして学力だけではなく非認知能力の獲得が重要なこと、大学へ行くと収入が大きく変わること、そして子どもに教育を受けさせるためには当然資金が必要で、そのために計画的に貯蓄をすることが重要なこと、毎日いくら貯蓄すれば子どもの大学進学のための学費を貯蓄できるのかなどの情報を提示した。そして、金融機関がないエリアであることから、貯蓄をする手段を知らない人も多いので、写真右下の貯金箱を無料で渡し、そこに子供用の貯金をしていくように推奨した。

強い雨が降って警報が出た日を除いては（警報が出た日でも出席率は 65% だった）非常に多くの保護者がワークショップに参加した。

このワークショップの実施時に、研究目的で後に説明するサーベイを実施することや、学校あるいは政府が実施している学力テストなどの情報を利用することについての同意書、子どもに対する介入中に発生した事故やトラブルについての免責の同意書に署名してもらったことに加え、親の向けの短いサーベイも

実施した。

このサーベイは主に、親の教育に対する関心や、親がどのように子どもの発達や健康を観察しているか、現在の収入や貯蓄の状況、子どもの進学への期待などを尋ねたものである。親自身が貧困のなかであって、非常に認知能力が低く、サーベイには 20 人以上の調査員を動員して、サーベイを正確に回答できるよう、サポートを行った。その結果、得られたデータは欠損の少ない正確なデータとなった。

またこの後（研究者は帰国後）、現地で調査の委託を受けている認定 NPO 法人ソルト・パヤタスが、指定されたワークショップに参加できなかった保護者を対象にして、家庭訪問を行い、簡易版のワークショップとサーベイを実施した。

この結果、調査対象者 1,109 人のうち 1,017 人の参加が得られ、91.7%という極めて高い調査参加率を達成することができた。

## ② 子どもに対する教育支援（子ども向けの介入）

子ども向けの介入は放課後に（専門家の指導・監修のもと）お絵かき（1-2 年生）、読み聞かせ（3-4 年生）、タブレット PC を用いた学習（5-6 年生）の各プログラムを実施した。これは週に 2 回のペースで行われ、生徒たちは授業が終了した後、介入が行われる教室へ来て、給食を食べた後（フィリピンの午前授業

は 6:00AM~11:00AM で行われるため、昼食を提供することで生徒の参加率を上げることに成功した)、トレーニングを受けた専門の指導者から指導を受けた。お絵かきについては、聖徳学院大学で芸術教育を専門とする奥村教授の指導を受けて、綿密にカリキュラムを作成し、クレヨンや画用紙などを用いて、創造性や自制心などを鍛えるような取り組みを行った。

読み聞かせは、生徒個人に本を配本したり、紙芝居のような形で現地スタッフがストーリーを一通り読んだ後で内容についてみなで議論するソーシャルリーディングの方法を取り入れるなど様々な方法をとった。

以 上